

大山街道八王子道・千人同心日光往還道ウォーク

第5回 坂戸駅から武蔵高萩駅

計画 歩行距離 約8.5km。

集合 坂戸駅改札口 10時

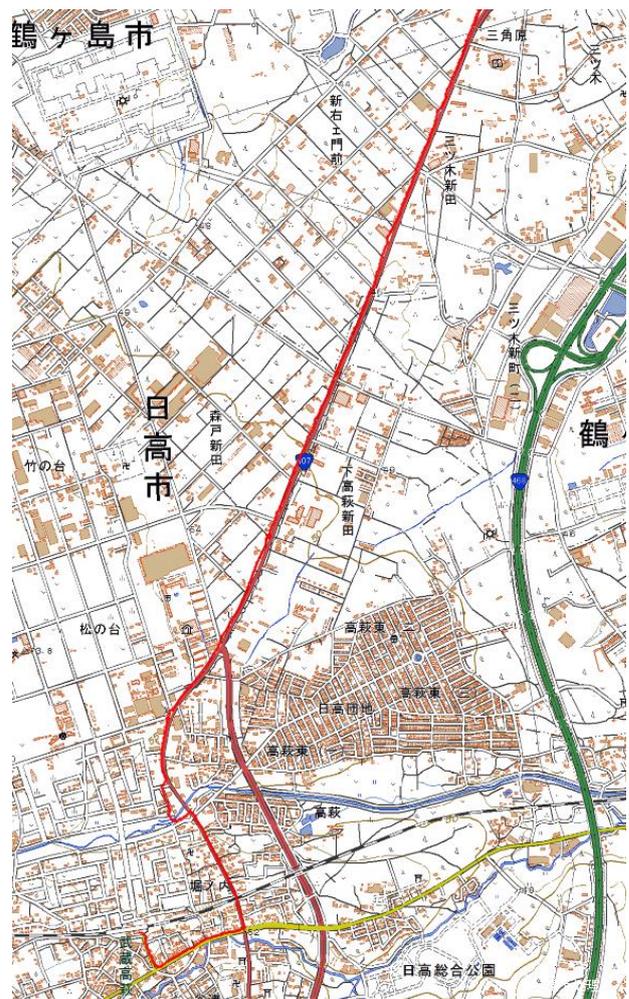
第5回坂戸駅から武蔵高萩駅

実施日 2020（令和2）年11月18日（水）天候 晴 気温 高く汗ばむほど

参加者 折本文夫、杉田 勝行、前北 勝司、中田 信義、伊藤 泰弘、中島 征雄 計 6名

コース 坂戸駅～（日光街道）～白鬚神社～才道木日光街道道標～庚申塔・馬頭観音～桜並木解説板～川崎平右衛門陣屋跡～日光街道と並木解説板～榜示杵（廃棄されたのか存在せず）～幸楽苑・（昼食）～地藏尊～並木南端～北小畔川～旧高萩郵便局～金毘羅大権現石碑～武蔵高萩駅

写真は、2019（R01）年5月11日と今日のものを使用。

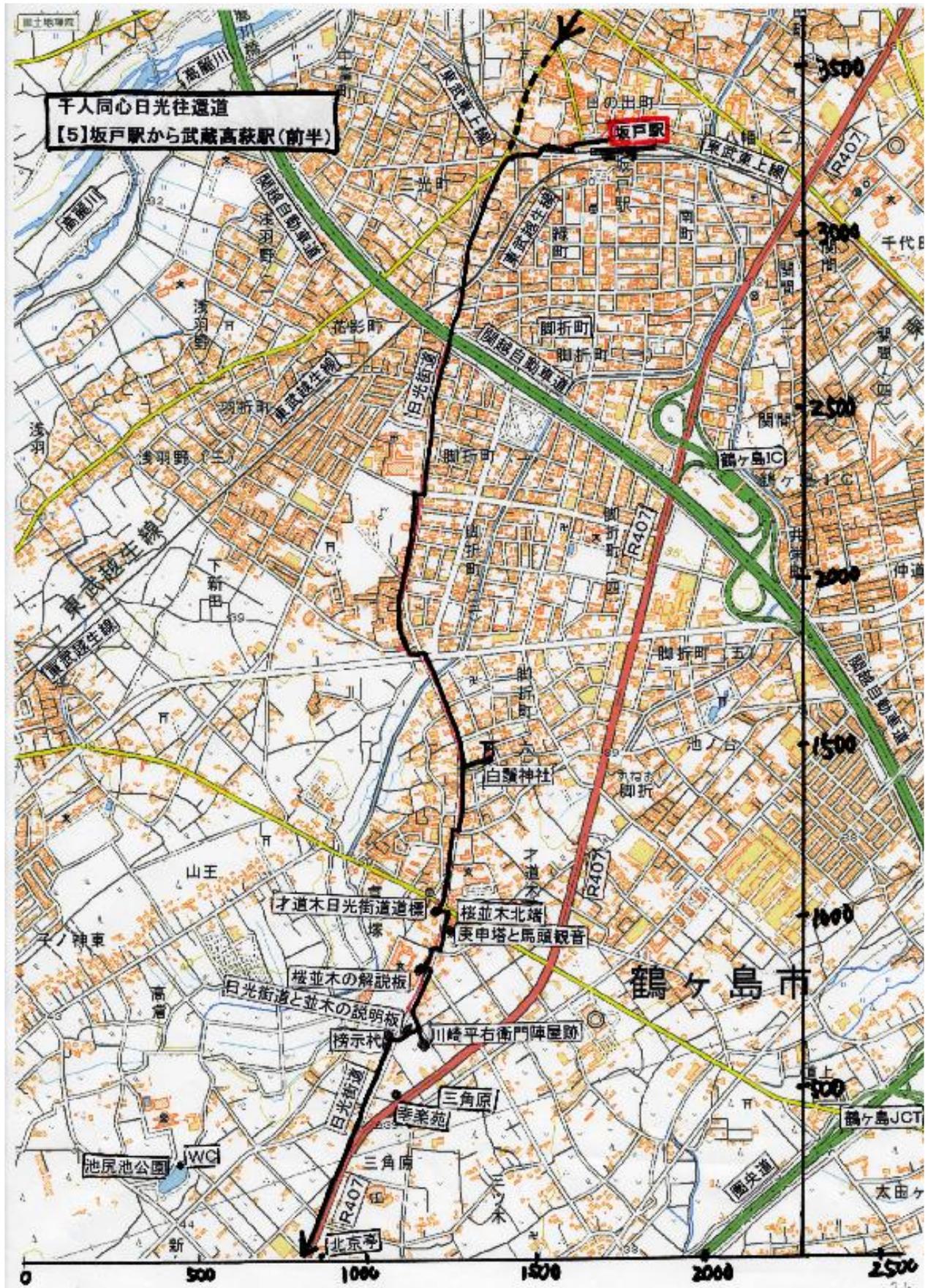


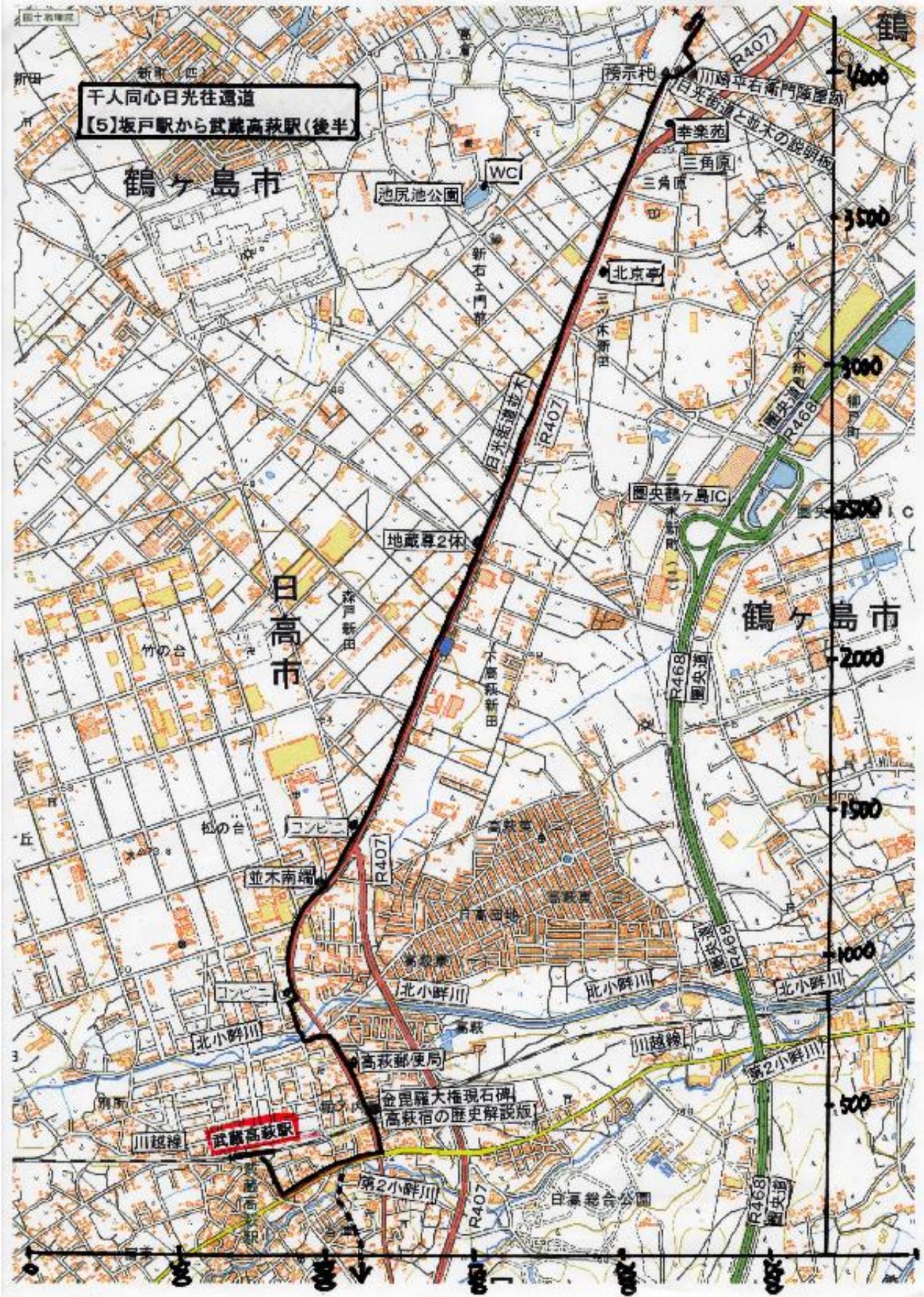
GPSデータ

歩行距離：8.6km。 累計歩行距離 44.9km。

全体所要時間：3時間18分。移動時間：2時間20分。停止時間：58分。

移動平均速度：3.18km/h。全体平均速度：2.20km/h。





千人同心日光往還道
 [5]坂戸駅から武蔵高萩駅(後半)

鶴ヶ島市

日高市

鶴ヶ島市

武蔵高萩駅



早朝から気温は高く、この時期の冷え込みではない。集合時間より30分も早く全員が集まったので、検温して、打ち合わせ後、駅北口を9時40分に出発。線路に沿って西へ、踏切を渡って道なりに進むと、県道74号線にぶつかる。左折して50m程先の信号のある三叉路は県道74号線から分かれて左の道に行く。この道が「日光街道」である。





三叉路から**300m**強で東武越生線の踏切を渡り、そのすぐ先で関越自動車道を潜る。潜った所に「日光街道」の標識がある。この辺で鶴ヶ島市に入り、「脚折（すねおり）町」というが、何かいわくがあるのか。



街道を淡々と歩き、関越自動車道から約**700m**の二つ目の信号の先で、旧街道は車道から斜め右に分かれる。道は住宅地の中を緩やかに左カーブして進む。太い車道にぶつかりと左折し、直ぐの信号交差点を右折して渡る。直進し、寿橋で細い川を渡り、橋から**250m**程の左側に鳥居があり、参道を入った奥に「白鬚神社」がある。



白鬚神社

白鬚神社は、奈良時代に武蔵国開拓のために移住してきて高麗郡を開いた高句麗人たちの崇敬した神社で、郡内の各村々に鎮座し、二十六社があった。

当社に祀られている猿田彦命は、白鬚神社の根本社といわれる近江琵琶湖西岸の白鬚神社(比良明神)の祭神で、天孫降臨の道案内をしたといわれ、寿福、武運、縁結びなどの神である。

また、武内大神は、高句麗を滅ぼした新羅を征伐した権臣で、勇武、長寿の代表者である。二柱の神とも老翁の姿で現れていることから白髪長寿の神であるといわれている。

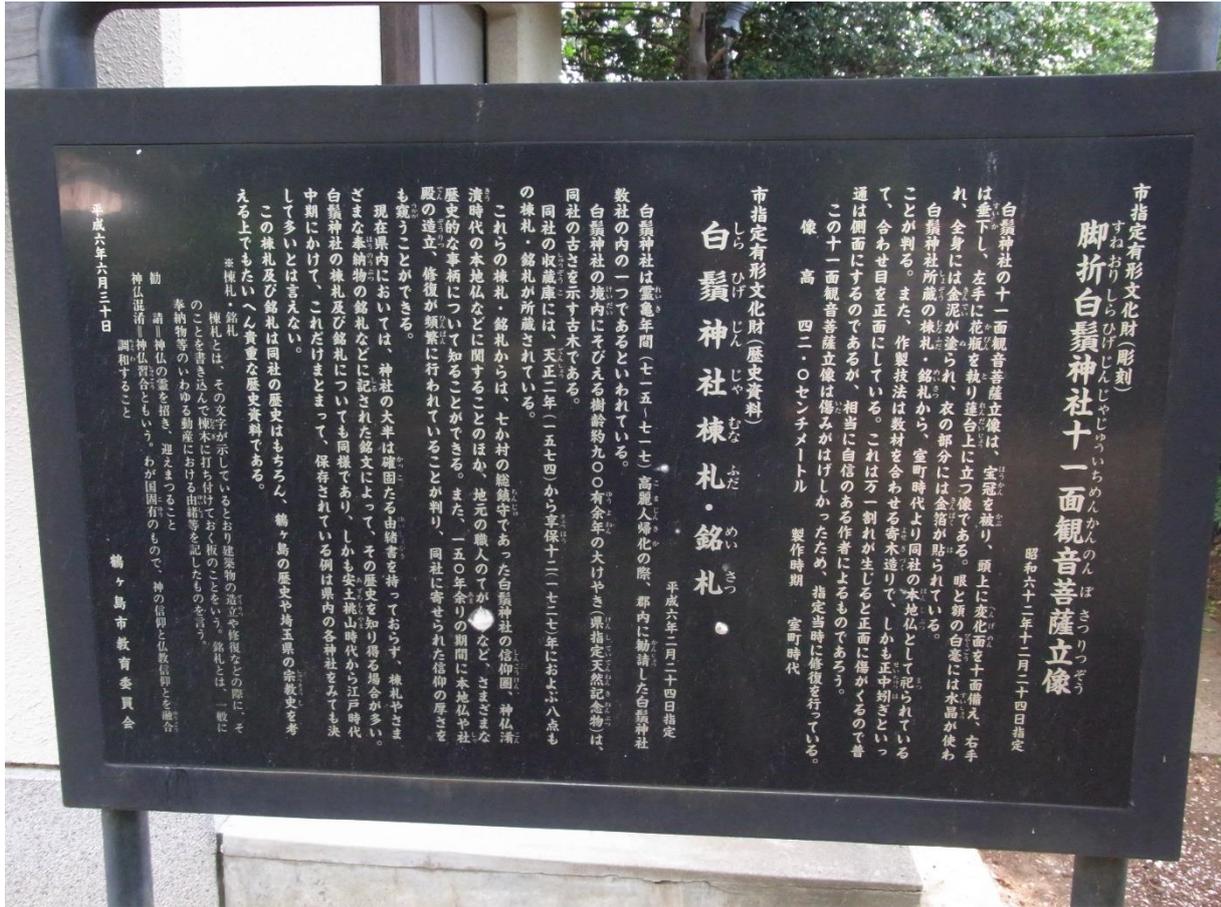
当社は、かつては、和田、高倉、大六道(上新田)、小六道(中新田)、太田ヶ谷、針口(ウ冠に口ノ口・宮に似ている、「うり」と呼ぶ)、脚折の七か村の総鎮守であった。

神社のうしろには、樹齢約七百年といわれる県指定天然記念物の欒(けやき)の大木があり、当社のご神木となっている。

昭和五十六年三月

埼玉県





市指定有形文化財（彫刻）脚折白鬚神社十一面観音菩薩立像 昭和六十二年十二月二十四日指定
 市指定有形文化財（歴史資料）白鬚神社棟札・銘札 平成六年二月二十四日指定

白鬚神社には、市指定有形文化財があり、県指定天然記念物のケヤキがある。

埼玉県指定天然記念物 脚折（すねおり）のケヤキ

指定年月日 昭和七年三月三十一日

幹回り七メートル 樹高十七メートル 樹齢九百有余年

この大けやきが指定された昭和七年当時は、樹高約三十六メートル、枝も二十数メートル四方に生い茂っていた巨木であった。しかし、昭和四十七年に風雨と自らの重みで枝回り三メートルもの大枝が破損し、中心となる幹の三分の一を裂き落下したため、翌年腐食防止及び支柱工事を行った。（後略）



白鬚神社から300m強の才道木（さいどうぎ）歩道橋の手前の三叉路の右手一角に植え込みがあり、そこに石碑があるが、なんなのかは不明。



日光街道を進み次の脚折才道木（すねおりさいどうぎ）交差点の南西角に「道標」があり、「才道木日光街道道しるべ」の解説板がある。



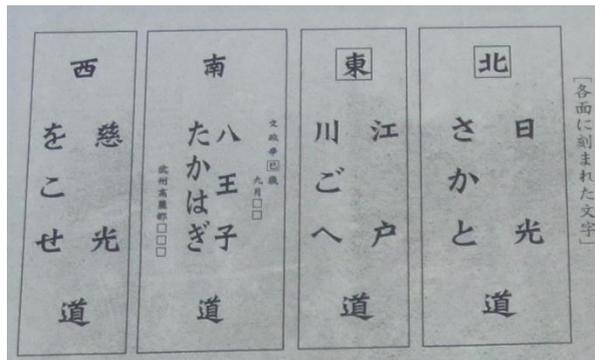
市指定有形文化財 才道木日光街道道しるべ 平成十八年三月八日指定

この道しるべは、江戸時代の八王子と日光、川越と越生を結ぶ重要な街道が交わった場所にあります。形は角形の石柱で、大きさは高さ七十三センチ、幅二十三・五センチ、厚さ十五センチ、刻まれた干支から文政四年（十八二一）のものであることがわかります。

道しるべの各面には、「**北** 日光 坂戸」、「**東** 江戸 川越」、「南 八王子 高萩」、「西 慈光 越生」と刻まれています。南北は、この道が八王子から高萩（日高市）、坂戸を経て日光に通じる日光街道であったことを表しています。日光街道は、江戸時代、日光火の番の任に就くため、八王子に住んでいた千人同心（八王子千人同心）が、八王子と日光の往来に使った街道で、「日光脇往還」「千人同心街道」等とも呼ばれています。また、東西は川越街道（越生道とも呼ばれた）であったことを示し、東は川越を経て江戸へ通じ、西は、越生を経て古刹慈光寺（ときがわ町）へ通じることを表しています。

この道しるべは、貴重な文化遺産として約二十メートル程北の場所で大切に保存されてきましたが、平成十八年三月移設されました。

平成十八年三月 鶴ヶ島市教育委員会



街道は、この辺りから桜並木となる。信号を渡った街道の左側に「庚申塔と馬頭観音」が祠に祀られている。

庚申塔と馬頭尊縁起

中国古代の道教に、干支の庚申の夜に人が眠ると体の中の「三尸（さんし）虫」がその人の日頃の罪を上帝に訴えて、命を短くするとの説があり、日本の庚申信仰はここから来ていると言われ、後に庚申の日には徹夜した過ごすという庚申講も行われた。

江戸時代までは、庚申の日には炒豆を食べ、女は針仕事はしなかった。

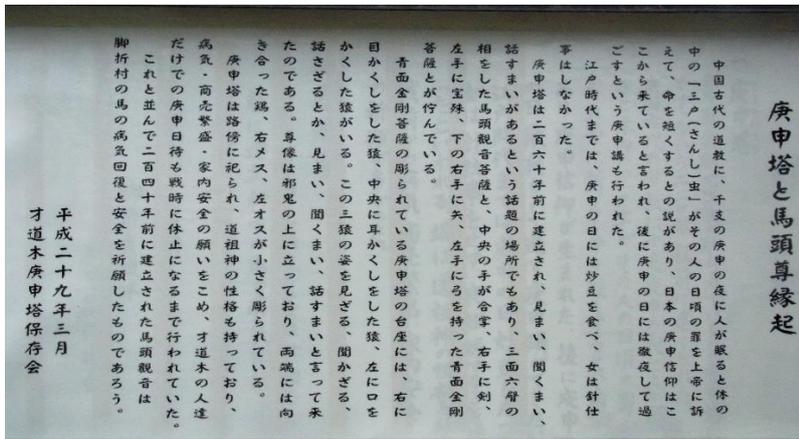
庚申塔は二百六十年前に建立され、見まい、聞くまい、話すまいがあるという話題の場所でもあり、三面六臂の相をした馬頭観音菩薩と、中央の手が合掌、右手に剣、左手に宝珠、下の右手に矢、左手に弓を持った青面金剛菩薩とが佇んでいる。

青面金剛菩薩の彫られている庚申塔の台座には、右に目かくしをした猿、中央に耳かくしをした猿、左に口をかくした猿がいる。この三猿の姿を見ざる、聞かざる、話さざるとか、見まい、聞くまい、話すまいと言って来たのである。尊像は邪鬼の上に立っており、両端には向き合った鶏、右メス、左オスが小さく彫られている。

庚申塔は、路傍に祀られ、道祖神の性格も持っており、病気・商売繁盛・家内安全の願いをこめ、才道木の人達だけでの庚申日待も戦時に休止になるまで行われていた。

これと並んで二百四十年前に建立された馬頭観音は脚折村の馬の病気回復と安全を祈願したものであろう。

平成二十九年三月 才道木庚申塔保存会



庚申塔と馬頭尊縁起

中国古来の道教に、千支の庚申の辰に人が眠ると体の中の「三尸(さんし)虫」がその人の日頃の罪を上帝に訴えて、命を短くするとの説があり、日本の庚申信仰はここから来ていると言われ、後に庚申の日は徹夜して過ごすという庚申講も行われた。

江戸時代までは、庚申の日は炒豆を食べ、女は針仕事はしなかった。

庚申塔は二百六十年前に建立され、見まい、聞くまい、話すまいがあるという話題の場所でもあり、三面六臂の相をした馬頭観音菩薩と、中央の手が合掌、右手に剣、左手に宝珠、下の右手に矢、左手に弓を持った青面金剛菩薩とが行んでいる。

青面金剛菩薩の彫られている庚申塔の台座には、右に目かくしをした猿、中央に耳かくしをした猿、左に口をかいた猿がいる。この三猿の姿を見ざる、聞かざる、話さざるとか、見まい、聞くまい、話すまいと言ったのである。尊像は邪鬼の上に立っており、両端には向き合った鶏、右メス、左オスが小さく彫られている。

庚申塔は路傍に祀られ、道祖神の性格も持つっており、病氣・商売繁盛・家内安全の願いをこめ、才道木の人達だけでの庚申日待も戦時休止になるまで行われていた。これと並んで二百四十年前に建立された馬頭観音は、脚折村の馬の病氣回復と安全を祈願したものであろう。

平成二十九年三月
才道木庚申塔保存会



道路の右側に渡り、80m程進んだ中学校の門の先に「桜並木」の解説板がある。



桜並木

この道は、古くは「日光街道」と呼ばれ、かつて日光東照宮を警護するため、八王子に拠点があった千人同心(幕府が江戸の外郭警備のために置いた武士集団)が往来した道で昔から交通の要衝とされてきました。

街道の杉や松は江戸時代(十七世紀後半)に植えられたものと言われ、かつては老樹が立ち並んでい

ました。この老樹も戦後にあった大型の台風により多くが倒れ、昔の面影がうすれていく有様を惜しんだ故川上庄作氏（三ツ木）が私費を投じて桜苗を購入し植え付け、現在の桜並木となりました。

この街道では、毎年三月下旬から四月上旬にかけて「桜まつり」が行われ多くの人で賑わい、憩いの場所として親しまれています。

これからも、この桜並木を皆様と共に親しみ、見守っていきたいと思います。

二〇〇一年四月七日

鶴ヶ島桜まつり実行委員会



街道の左側に渡り100m程進んだ斜め左に入った奥に「川崎平右衛門陣屋跡」がある。



鶴ヶ島市指定史跡 武州三角原（さんかくばら）

川崎平右衛門定季陣屋跡 平成八年三月二十一日指定

川崎平右衛門定季は元禄七年（十六九四）武蔵国多摩郡押立村（現在の府中市）の名主の家に生まれました。元々農業に従事し、荒地の開墾や用水・灌漑の改善など各種振興事業を行ったり、私財を投じて窮民を救ったこともあり、篤農家として村民からは厚い信頼を受けていました。抜擢されて新田世話役、のちに代官となり武蔵野新田開発を成功に導きました。この三角原は新田開発に当たり、彼が拠点として陣屋を設けたところです。

享保七年（十七二二）徳川吉宗による新田開発令が出て、武蔵野台地の全面的な開拓が進められたが、これは多数の新田村をつくり、石高にして十一万二千石（一石は約一八〇リットル）の増収を得ようとする計画でした。

開発当初の出百姓（入植者）は困窮はなはだしく、また大凶作にも見まわれ、元文四年（十七三九）には新田の総家数十三二七戸のうち十六一戸が潰れ百姓（破産した農家）となり、どうにか生活していけるものはわずか九戸であったといえます。幕府は武士が指導した新田開発が失敗した苦い経験から農民出身の平右衛門を南北武蔵野新田世話役に登用し、農民の実情にあった新田開発事業を推進させました。

平右衛門と農民の努力の結果、多摩郡・高麗郡・入間郡・新座郡にわたって五百町歩（約五〇〇ヘクタール）の新田がみごとに開墾され、やがて享保三年（十七四三）平右衛門は代官に任せられました。

その後、明和四年（十七六七）、平右衛門は幕府勘定所の検査をする勘定吟味役兼銀山奉行となりましたが、同年六月七四才で生涯を終えました。

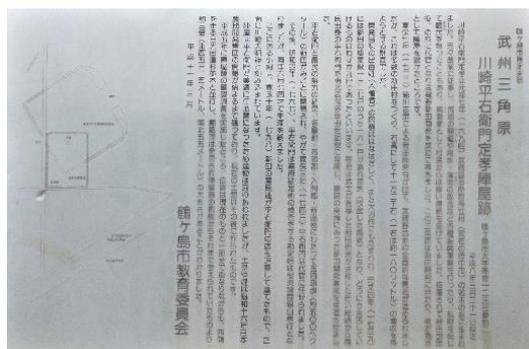
ここにある小祠は、寛政十年（十七九八）新田の農民達が平右衛門の徳を追慕して建てたもので、正面に川崎大明神と刻み込まれています。

陣屋は平右衛門が美濃に任地替になったため建物は取り払われましたが、土塁や堀は昭和十六年日本農地開発営団の開墾が始まるまで残っており、現在の土塁はその後に作られたものです。

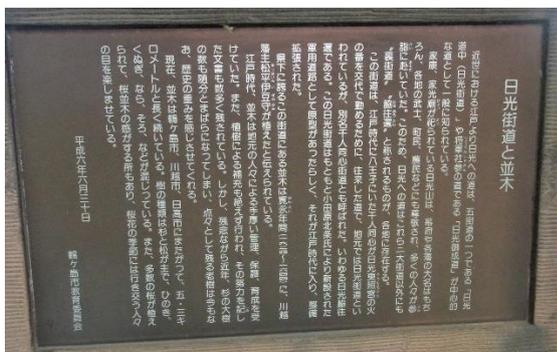
平成五年に陣屋跡の確認調査を実施したところ、位置は現在のものと一部分で重なりながらも、西側を走る日光街道杉並木と並行し、堀跡等は発見され陣屋跡の規模からそれまで考えられていたものより約三倍（東西五三.五メートル、南北五五メートル）の大きさがあることがわかりました。

平成十一年三月

鶴ヶ島市教育委員会



陣屋跡から農道を南西に向かい、日光街道と交わる手前の右側に「日光街道と並木」の説明板がある。



日光街道と並木

近世における江戸より日光への道は、五街道の一つである「日光道中（日光街道）」や將軍社参の道である「日光御成道」が中心的な道として知られている。

家康、家光廟が祀られている日光山は、幕府や各藩の大名はもちろん、各地の武士、町民、農民などにも尊敬され、多くの人々が参詣に赴（おもむ）いていた。このため、日光への道はこれら二大街道以外

にも“裏街道”“脇往還”と称されるものが、各地に存在する。

この街道は、江戸時代に八王子にいた千人同心が日光東照宮の火の番を交代で勤めるために、往来した道で、地元では日光街道といわれているが、別名千人同心街道とも呼ばれた。いわゆる日光脇往還である。この日光街道はもともと小田原北条氏により新設された軍用道路として原型があったらしく、それが江戸時代に入り、整備拡張された。

県下に誇るこの街道にある並木は寛永年間（十六二四～十六四四）に、川越藩主松平伊豆守が植えたといわれている。

江戸時代、並木は地元の人々による手厚い管理、保護、育成を受けていた。また、植樹による補充も絶えず行われ、その努力を記（しる）した文書も数多く残されている。しかし、残念ながら近年、杉の大樹の数も随分とまばらになってしまい、点々と残る老樹は今もなお、歴史の重みを感じさせてくれる。

現在、並木は鶴ヶ島市、川越市、日高市にまたがって、五、三キロメートルと長く続いている。樹の種類は杉と松が主で、ひのき、くぬぎ、なら、そろ（アカシデ、イヌシデ等シデ類：中島注）、などが混じっている。また、多数の桜が植えられて、桜並木の感がする所もあり、桜花の季節には行き交う人々の目を楽しませている。

平成六年六月三十日

鶴ヶ島市教育委員会

傍の信号のある歩道を渡ると右角に「**榜示杵**」と「**説明板**」があるはずが撤去されてしまったようだ。



榜示杵（ぼうじぐい）

榜示とも書く。榜示とは領地の境界を示す標識のことで、古代、中世の寺院、神社の所領や荘園などの範囲を確認するため、その四至、すなわちその四方に設置されたのがはじまりという。一般に石材や木杭、自然木などが利用された。

越後国、奥山荘（新潟県蒲原郡）の石榜示のごとく巨石を用いた例などもある。

明治初年まで当市の日光街道にも村境を示すものとして、二本の榜示杵（木杭）が立っていた。

平成六年六月三十日

鶴ヶ島市教育委員会

街道から左に入った所に昼食場所の幸楽苑がある。まだ、早い時間だったので空いていた。（10：58～11：35）

260m程進んだ高倉天神交差点で日光街道は国道407号線に合流。



これから2.6km先の並木が終わるまで一直線の道が続き、右側の並木をただ、淡々と歩く。



1. 4km程の信号交差点の手前の茂みの中に地蔵尊が二体ある。一体の脇に彫られている文字は読めない。

1km程進み、高萩北杉並木交差点で左に国道407号線を分けて、直進。



100m程で並木は終わり、道は左にカーブする。ファミリーマートの先の道を右に入り、最初の道を左折すると北小畔川に突き当たるので右の橋を渡る。

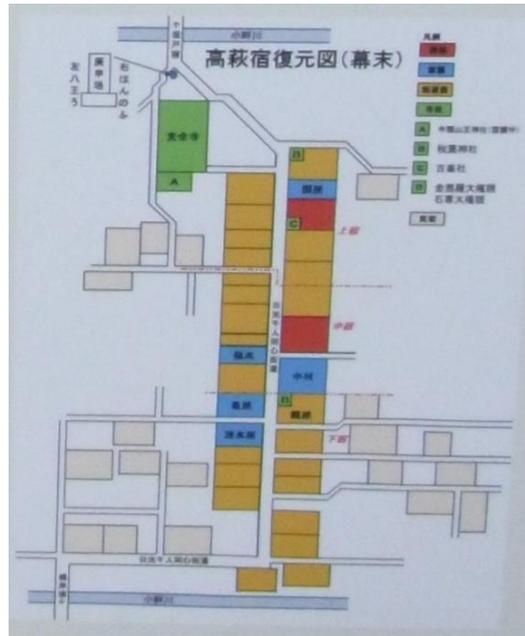
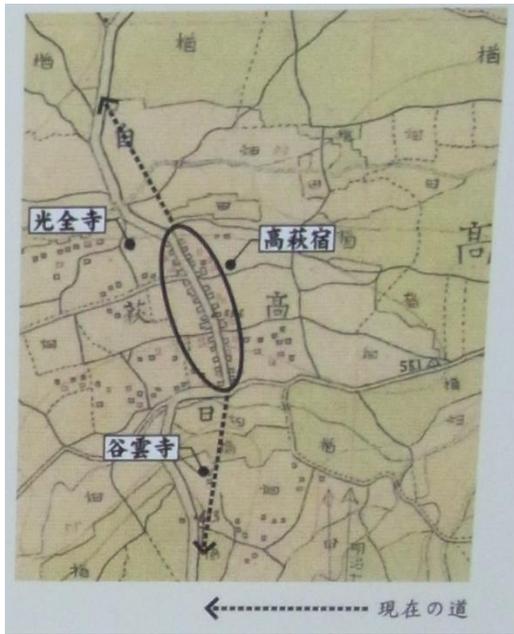


旧街道は斜め左に進んでいたが、今は道が無いので、川沿いに左折し、先ほど分かれた車道の戻る。この辺りから高萩宿となる。川越線のガードの先の高萩交差点までが宿であった。



長い立派な塀を持つ屋敷の先に明治十二年に設置された「高萩郵便局」が残っており、その先、八高線のガードの手前に「金毘羅大権現」の石碑と「高萩宿の歴史」と「清水喜右衛門（清水万次郎 高萩の万次郎）」と金毘羅大権現」の解説板がある。





高萩宿の歴史

関東を支配していた小田原北条氏（後北条氏）は、北からの勢力に対抗するため八王子城、川越城、松山城、鉢形城を固め、兵員や軍需物資の移動のため街道や宿場（伝馬）を整備しました。そのひとつとして八王子城から松山城、そして鉢形城を結ぶ街道が整備され、天正年間、織田信長が本能寺の変で亡くなる頃、高萩に新たに宿場が設けられ、二・七の六斎市（2日、7日、12日、17日、22日、27日の6日間市が立つ）が実施されました。隣の坂戸宿もこの頃新設されました。

江戸時代に入り、東海道平塚宿（神奈川県）と中山道熊谷宿との往復道として利用される一方、八王子千人同心が日光（江戸幕府初代将軍徳川家康を祀る東照宮がある）の火の番を交代でつとめることになり、後北条氏が整備した街道が利用され、承応元（十六五二）年、八王子から高萩を通り日光に行くルートが定められました。以来、高萩を南北につらぬく道は日光千人同心街道（日光脇往還）と呼ばれました。高萩宿は、八王子から6番目の宿場でしたが、宿泊することはありませんでした。旅宿というよりは継立宿としての性格が強い宿場でした。高萩宿は参勤交代で大名が利用する街道ではなかったため、本陣・脇本陣はなく、旅籠が数軒（「亀屋」「清水屋」他）ありました。また、宿場の最高責任者である「問屋（といや）」が2軒あり、交代で役職を勤めていました。全体では宿場通りの左右に30軒ほどの家並みがありました。

問屋の主な仕事は「人馬の継立業務」でした。人馬の継立とは、幕府関係者（八王子千人同心）や大名の家来や大きな寺社関係者が旅をする際、これら関係者の荷物を次の宿場（狭山の根岸宿、坂戸宿）まで、高萩村・下高萩村の村民に馬を使ったりして運ばせる仕事です。これを「伝馬」といいます。ただし費用は、朱印状（証明書）持参の場合は、帰定数以内ならすべて地元負担でした。両村だけでは人数が足りない場合、女影村・大谷沢村・下大谷沢村などに協力してもらいました。これを「助郷」といいます。伝馬費用は地元負担であったため高萩村を苦しめ、安政2（1855）年の記録では、高萩村下高萩村併せて家数は112軒でしたが、以前と比べると47,8軒も減ったといえます。伝馬の負担はいかに大きかったかがわかります。

明治に入り宿場としての役割は終わりますが、高萩宿は変わらず地域の中心でした。明治11年11月に黒須警察署高萩分署が新設され巡査5人が配属されました。また翌明治12年12月高萩郵便局が創置されました。郵便局の建物は現在も残っていますが、警察署高萩分署については明治12年の大火

で焼失、光全寺に仮分署が置かれましたが再建されず、同16年に改めて交番所が上宿に置かれました。

高萩宿の歴史

関東を支配していた南北朝時代（後醍醐天皇）、北からの勢力に対抗するためへ五城、川崎城、和山城、形原城を築き、兵衛中軍の移動のため御宿中宿場（御宿）を整備しました。そのひとつとして高萩宿が築かれ、そして御宿中宿場の宿場が整備され、元禄年間、御宿宿長が長年の中で定着するも、高萩に新たに宿場が設けられ、二・七の宿場（二日・七日・十日・十日・十日・十日・十日）の6日宿場が設けられ宿場されました。この宿場の宿場の宿場が宿場されました。



江戸時代に入り、東海五街道（神奈川街道）と中山道宿場とのはずれとして宿場を整備し、元禄年間、御宿宿長が長年の中で定着するも、高萩に新たに宿場が設けられ、二・七の宿場（二日・七日・十日・十日・十日・十日）の6日宿場が設けられ宿場されました。この宿場の宿場の宿場が宿場されました。

高萩宿は、高萩宿に宿場が設けられ、元禄年間、御宿宿長が長年の中で定着するも、高萩に新たに宿場が設けられ、二・七の宿場（二日・七日・十日・十日・十日・十日）の6日宿場が設けられ宿場されました。この宿場の宿場の宿場が宿場されました。

清水喜右衛門（清水万次郎 高萩の万次郎）と金毘羅大権現

幼名「万次郎」通名「喜右衛門」成人名「信孝」（※金毘羅碑、墓石は「孝信」）通称：「高萩の万次郎」
文化2(1805)年6月14日生～明治18(1885)年5月22日没。



清水喜右衛門

「鶴屋」を屋号とし十手持ちでした。先代の喜右衛門こと父弥五郎は名主でしたが、文化9(1612)年退任しました。時に万次郎8歳であったため、組頭だった井上文八が名主役に就きました。万次郎は高萩宿では宿役人の「年寄」を勤め、文久元年の和宮下向の際、中山道熊谷宿から助郷の命令書が届いた折には、宿役人年寄として同屋とともに熊谷宿へ赴き助郷免除を嘆願しています。また、慶応2(1866)年に起こった武州一揆の際は、宿はずれに出て一揆衆に酒や飯を振る舞い、高萩宿での打ち壊しを回避させています。

侠客としても有名で、近隣の侠客から一目置かれるとともに清水の次郎長とも親交がありました。若かりし次郎長を匿ったことが縁で、その親交は喜右衛門の晩年まで続きました。明治15年11月には、次郎長の養子になった放浪の写真師天田愚庵が喜右衛門宅を訪れ、喜右衛門の写真を撮影しています。同年12月喜右衛門は次郎長に年賀を届けています。「鶴屋」は「亀屋」の向かい側にありました。生業については、明治9年「青物問屋」を営んでいたことは明らかですが、その前後についてははっきりしないところがあります。家は、明治15年末以降のところで下宿から上宿に転居しています。

当地の「金毘羅大権現」碑は、喜右衛門が慶応2年に願主として建立したものです。以来毎年祈願を続け「祈願無事永続」をもって明治15年12月に鶴屋で「金比羅講」が催されました。そのとき現在の日高市・飯能市・坂戸市・鶴ヶ島市・狭山市・入間市・所沢市をはじめとした県内の他、府中市・青梅市、遠くは山梨県そして静岡県計57村宿町湊から延べ78人にのぼる有力者（大半が戸長）が世話人として名前を連ねています。中には「山本長五郎（清水次郎長）」「宮崎文吉（津向文吉）」「宮下仙右衛門（耕川仙右衛門）」など講談や小説に登場する有名人は侠客名もありました。この他に「関小次郎こと小金井小次郎」の息子和十郎の名前もあります。

金毘羅大権現碑の文字は「異体字」という、読み・意味は同じでも、通常の漢字と異なる貴重な文字です。

なお、石尊大権現の御神燈に刻まれた「高萩取（駅は宿取のこと）」は、この地に高萩宿が存在したことを示す唯一の証です。また同じく御神燈に刻まれた「鍛冶屋内手」は、明治に入り消滅した地名（今の下宿の一部）です。いずれも郷土の歴史を語る貴重なものです。なお、この御神燈の文字と金毘羅大権現の文字は同一人物（柴梅道人）によって書かれたものです。「道人」とは書道家の雅号の下に付ける文字です。

※金比羅再建碑の文字は、元の碑から採った拓本から起こしました。

再建前の金毘羅大権現碑（昭和47年撮影）
平成29年6月 金比羅宮碑等再建並びに整備委員会





ガードを潜って、高萩交差点を右折する。冬桜が満開



120・30m進んで左の橋を渡って川沿いに進む道が街道なのだが、曲がらず進み、高萩駅前信号交差点を右折、少し上ると武蔵高萩駅がある。



12時57分到着。今日はここまで。